

研究紀要

第49集

1. はじめに	校長 新開 眞琴	1
2. “わかる”を目指して — 製作遊びを通して —	幼稚部	2
3. 自立活動学習指導案	小学部 丸橋 由佳	11
4. 数学科学習指導案	中学部 中林 輝一	20
5. 国語科現代文学習指導案	高等部 吉岡 直也	27
6. 「学力向上のための課題学習」の取り組み	高等部 尾形 剛	43
7. 寄宿舍における研究活動	寄宿舍	57
8. 編集後記		62

2017年3月
大阪府立大阪北視覚支援学校

明治 33 年（1900 年）私立大阪盲啞学院として創立した本校は、明治 40 年に大阪市に譲渡され、大阪市立盲啞学校と改称、さらに大正 12 年に聾啞学校と（現大阪府立中央聴覚支援学校）と分離し、大阪市立盲学校となりました。平成 21 年には大阪市立視覚特別支援学校への名称変更がありましたが、多くの方から「市盲（しもう）」という呼び名で親しまれ、116 年の長きにわたり大阪の視覚障がい教育の専門教育機関としての役割を担ってきました。

本年度は、さらに大阪市から大阪府への移管という公立学校としての大きな転機を迎え、名称も「大阪府立大阪北視覚支援学校」として、新たな歴史を歩むこととなりました。

全国的に視覚支援学校の幼児・児童・生徒の在籍者数は減少を続けており、学校規模は小さくなりつつあります。その中で専門性の維持・継承は喫緊の課題であり、各校で研修計画や校内体制の工夫改善が続けられています。本校においても、視覚障がい教育に関わる高い専門性はもちろんのこと、特別支援教育として個別のニーズの多様化に応じた的確な指導計画を組み立て実践できる指導力、ICT 機器の活用等社会の変化を意欲的に取り入れる授業、幼児・児童・生徒の社会参加を早期から考える視野の広いキャリア教育等、求められ期待される幅広い役割を果たす努力を続けています。

今年度も本校では全校、各学部等で様々な研修会が行われました。回数・内容とも充実したものです。各学部の公開授業や各年次の研究授業を実施後は学部内で研究討議を行い、全員が日々の授業に活かしています。すべては幼児・児童・生徒の最善の成長につながることを目標です。また、それらの活動の一部を紀要に掲載し発信することは、世代交代が進む現在の視覚支援学校の大きな使命であるとも考えます。これからも全国及び近畿の視覚支援学校の取り組みや成果を積極的に集め、取り入れつつ、大阪府の視覚障がい教育を支え発展させていくという気概をもって研究活動等をさらに進めていきたいと思っています。皆様には、本紀要に忌憚ないご意見をお願いいたします。

—「大阪北」の名称が早く周知され親しまれるようお願い—

平成 29 年 3 月
大阪府立大阪北視覚支援学校
校長 新開 眞琴

“わかる”を目指して

—製作遊びを通して—

幼 稚 部

1 はじめに

幼稚部には3歳児2名、4歳児6名、5歳児2名、あわせて10名の幼児が在籍しており、発達段階に応じた2つのグループにおいて日々の生活や様々な保育活動を計画、実践している。

昨年度は、『幼児の実態に合わせてわかる経験を充実させる』という目標のもとに、何にでも触れる手、探索できる手を育てるために楽しみながら系統的に感触遊びを体験させたり、生活や遊びのいろいろな場面を見て、触って、確かめる活動を繰り返し経験させたりする取り組みについて報告した。その中で、視覚障がいがある幼児の触る活動は幼児自身の見てみよう、触ってみよう、やってみようという気持ちが大きくかかわっていること、そして幼児が楽しみながら“わかる”活動を実践するためには素材選びや環境整備の工夫、そして周囲の人とかかわることの大切さに対する私たち保育者自身の理解と配慮が欠かせないことなどを確認した。(平成27年度本校研究紀要参照)

さて、幼児にとって“知る・わかる”活動は実体験によるところが大きいことは昨年度も確認したが、この実体験とは心と体で、そして五感を通して“知る・わかる”を実感できる経験であり、私たちが保育活動を計画・実践するうえで欠かせない重要な柱となる要素である。

現在幼稚部で行っている保育内容はリズム、リトミック、その他の様々な活動、中でも製作遊びは幼児にとっての“知る・わかる”活動としてとても重要な体験的活動であると考えている。

そこで、今年度は幼児が体感的に“知る・わかる”保育を実現するために製作遊びの実践をとおして日頃私たちが大切にしていることを、事例をあげて説明してみたい。

2 製作活動 事例

(1) リスグループの実践

<グループの実態>

リスグループは6名（年長2、年中3、年少1）。他の障害を併せ持つ幼児が多い。触ることがまだまだ苦手であるが昨年度、年間通じて感触遊びを繰り返し経験してきたことで、少しずつではあるが触る活動に対しての不安が和らいできている。また、身近な人と一緒に安心して取り組める環境や、生活や遊びの中での経験や感じたことをことばにしながらから“知る・わかる”体験を積み重ねることも大切に日々の保育を行っている。

a. アジサイ

「春」「夏」「秋」「冬」それぞれの季節感を味わい、身近な自然環境に興味をもてるよう、こいのぼり、いちごなどの製作を行ってきた。今回は、梅雨の季節を伝える取り組みとして、アジサイ製作を行った。製作に入るまでの導入としてリズムや生活のあらゆる機会をつかって「夏」「雨」など、関連するキーワードを繰り返し伝えてきた。雨が降ればみんなで耳を澄ませ音を楽しんだり、手を伸ばし雨に触れてみたりと様々な体験を通してイメージとことばをつなげられるよう取り組んだ。そして、雨がたくさん降る梅雨の季節に咲く花としてアジサイを題材として選んだ。また、昨年度から“触る”活動にもたっぷり取り組んできた経験も活かされるようにと、扱った経験のある素材として紙粘土を選んだ。

●活動内容

- ① アジサイを触わる。花びらの柔らかさや全体の丸みを感じる。
- ② 材料を確認する。
- ③ 紙粘土をこね、紙皿に貼り付けていく。
- ④ 綿棒や指先を使い花びら（カラーポリ）を紙粘土に押し入れていく。



● 配慮する点

- ・ 触ることが苦手な幼児には、安心して活動できるようじっくりと関わりながら、めん棒など道具を補助的に活用する。
- ・ 落ち着いた雰囲気の中で製作できるような環境を整える。
- ・ 素材の変化が楽しめるような声かけや作る（表現する）楽しさに共感する。
- ・ 仕上がった作品をみんなに発表し、できた達成感が味わえるようにする。

b. オリジナル帽子を作ろう

おはなし遊びをするうえで、ことばだけのやり取りではなくイメージを膨らませ遊びが広げられるようにと衣装や小道具などを具体化し工夫している。子どもたちにとって身近なアイテムの帽子が登場し、簡単なやりとりがくり返されるおはなし遊びの題材として絵本「素敵な帽子屋さん」を選んだ。おはなし遊びを追体験するなかでも、様々な形や素材の帽子を手渡しても自然と自分から被り、帽子のイメージはしっかりと持っていた。さらに、イメージが膨らむようにと実際にかぶれる大きさの自分の帽子を作り、その帽子を使って先生や友だちと「ぼうしください」「どうぞ」「ありがとう」のやり取りも楽しみながらおはなし遊びを楽しんだ。

● 活動内容

- ① 材料を確認する。
- ② それぞれの実態に合わせた材料や道具を使い、切ったり、貼ったり、ちぎったりする。

● 配慮する点

- ・ 楽しんで、活動に取り組めるよう今まで扱ったことのある材料を用意しておく。
- ・ 自分で好きな材料が選べるよう素材の感触など丁寧に伝えオリジナルの帽子を作る。
- ・ 初めてはさみを経験するので、一回で切れるような大きさや切った時の感覚が伝わりやすい素材を用意しておく。



- ・両面テープをめくったり紙をちぎったりする時には、指先を意識させる。

c. くるくる丸めてみよう

製作活動をとおして、ちぎる、押し入れる、ねじるなど基本的な手指を操作する力の発達を促す内容にも取り組んできた。ほんの一例に過ぎないが“丸める”という動作に視点をおき取り組んだかたつむり製作。

“丸める”にも様々な手指先の使い方があるが、今回は、紙を丸めて立体的に作った。この紙を丸める手指先の動きは、毎日の給食時に行っているタオルを“丸める”動作をヒントにしている。この製作を行うにあたっては、上記の1のアジサイ製作の時のように導入場面には、かたつむりのイメージを深める取り組みも合わせて繰り返し行ってきた。

活動内容

- ① 材料を確認する。
- ② 傘袋にお花紙を握ったり丸めたりした物を入れ、体部分を作る。
- ③ 包装紙を棒状にしてねじり、両手を使って端から順に立体的に丸め、殻の部分を作る。
- ④ 両面テープを使い、体、殻を貼り合わせる。
- ⑤ モールと丸形黒目を貼り付ける。



配慮する点

- ・“かたつむり”ということばとイメージとを結び付ける。
- ・「くるくるしようね」など幼児がわかりやすい言葉を使って動作を促しながら“丸める”ということばと動作を結び付ける。
- ・素材の変化が楽しめるような声かけや作る（表現する）楽しさに共感する。

(2) ぱんだグループの実践

<グループの実態>

ぱんだグループは4名(年中3、年少1)。弱視児が多いが、様々な素材を主体的に触って確かめたり、経験したことや考えたことを次の興味や理解につなげたりする活動の積み重ねが自信や意欲につながっている。生活や遊びの中で“知る・わかる”ことを広げ深められる体験的な活動を多く取り入れるように心がけている。

a. とんぼ

だんご虫、蝶、蝉、カマキリ、バッタなどの昆虫に興味を持っていた子どもたちに、秋を意識させるきっかけとして戸外を飛び交っているとんぼを題材に選んだ。とんぼの身体表現、歌遊び、実物触察を取り入れたところ、とんぼの特徴などに関心を持ったり気付いたりする様子が見られた。また、過去にアルミカップや折り紙を折ったり、新聞紙を巻いたりする活動をたっぷり楽しんだ経験が活かせる活動として、とんぼの製作を設定した。

●活動内容

- ①材料の特性(新聞紙・片段ボール・ホイル紙、表裏の区別)や“巻く”ということばの意味を確認する。
- ②新聞紙を巻き、その外側を片段ボールで巻く(体)。
- ③ホイル紙の色を選び、2回折る。さらにホイル紙の両端の角を折って三角にする(羽根)。
- ④土台(体)に羽根を、体に対する向きを考えさせながら布ガムテープで貼り付ける。
- ⑤丸い画用紙にサインペンで目を描いて、位置を考えながら貼り付ける。



● 配慮する点

- ・“巻く”活動経験を発展させて前回とは異なる素材（カラーホイル紙）を扱ったり、前回より細く巻くことを経験させたりする。
- ・“巻く”ということばの意味やとんぼの体の各部の特徴、体に対する、羽根の方向や位置などを考えさせる。
- ・材料の色を自分で選ばせることで、より活動や作品に愛着が持てるようにする。
- ・材料（カラーホイル紙、片段ボール）の特性を知らせ、表裏を判別させる。

b. 秘伝の書

忍者ごっこやオペレッタ（文化祭の舞台発表）遊びの一環としてクッキング（ご飯を炊く、おにぎりを握る、具材を入れる、食べる）を体験させた。子どもたちはおにぎり作りをとおしてその手触り、温度、大きさ、手順、味などについて新鮮なイメージを持つことができた。オペレッタに登場する秘伝の書はオペレッタの中で重要なアイテムであり、秘伝の書にはごはんの炊き方が記されていることをすでに知っている子どもたちに、その新鮮なイメージを自分なりの感性で表現させたいと考え、秘伝の書製作を設定した。製作するにあたり、オペレッタのセリフや歌で巻物探しを再現したり、具体物を使って米の形状や米とぎの感覚を思い出せるような活動を経験させてから取り組んだ。

● 活動内容

- ①活動経験（巻物、クッキング）のイメージを共有する。
- ②具体物（小ビーズ：米に見立てる）を触って米の大きさや米とぎの動作（手の動かし方）を思い出す。
- ③指先に絵の具（ポスターカラー：黒）をつけて和紙に描く。



● 配慮する点

- ・経験を思い出せるように具体的に話す。
- ・イメージ（米の大きさ・量、米とぎの手の形・動かし方、おに

ぎりの大きさ・形・入れる具材など）をことばや描画で自分なりに表現できるような声かけをする。

c. てぶくろ

折る、巻く、通すなど、同じ動きをくり返す活動でそれ自体が楽しい経験をしてきた子どもたちは、異なる素材でも同じ要領を再現できるようになっている。また、その中で素材（形、大きさ、感触など）の違いに気付いたり、選んだり、素材を扱う順序を意識して取り組む姿も見られるようになってきた。通す活動としては、モールにビーズを通す、リボンにビーズ・台紙・画用紙片・ストローを通すなどの活動を、作品としては七夕飾り、クリスマスリース、クリスマスツリーなど季節や行事にかかわる経験を含めた活動をとおして積み重ねてきた。このように作業の要領を得て、さらに発展した形で取り組んでいた子どもたちに布をかがり合わせる経験をさせたいと思い、冬の季節に身近なアイテムであるてぶくろ製作を設定した。

●活動内容

1日目

- ①材料（フェルト・毛糸）の名称を知り、それぞれの色を選ぶ。
- ②端の穴から順番に毛糸を通していく。
- ③自分の手にはめてみる・作品を発表する。

2日目

- ①自分で縫い合わせた手袋にフェルトシールで装飾する。
- ②好きな色・形のシールを選んで貼る。
- ③自分の作品を発表する。



●配慮する点

- ・季節や用途などのイメージや関心を持てるような話や歌遊びなどの活動を取り入れる。
- ・材料の色を選ばせて自分の作品に対する思いを高められるようにする。

- ・製作中の指示の理解を促すために、材料・形・動作などの名称や作業の手順などを確認してから活動を始める。
- ・穴を指先で確認しながら通す要領を丁寧に知らせる。
- ・糸やりボンが絡まってもなるべく手直しせずに自分で最後までやり遂げられるようにして達成感を味わわせるようにする。
- ・活動内容が多く長時間続きそうな場合、集中が途切れないように個々の状況に応じて声をかけて励ましながら進める。
- ・自分の作品（てぶくろ）を実際に手にはめて作品の特徴（形、用途・感触など）を実感できるようにする。
- ・自分の作品の特徴や頑張った部分を話し合い、友だちや教員からの評価（フィードバック）を実感できるようにする。同時に友だちの活動や成果にも関心を持って作品を触ったり話を聞いたりできるよう促す。

3 まとめ

幼児にとって製作遊びは単に作品を作るという活動ではなく、幼児にとって“知る・わかる”ための必要な活動であると同時に、非常に多くの学びの可能性を持つ活動であると考えます。私たちが製作活動を通して大切にしていることをまとめると次のとおりです。

- ・幼児自身がいろいろな素材に直接働きかけながら、繰り返し楽しめる活動である。また働きかけ方によって出来あがる作品は様々に変化する。手指を使ってしっかり経験した活動は、時間がたっても再現することができ、再度楽しめることが多い。また繰り返すことで、より操作性が高まっていく。
- ・幼児自身や友だちと一緒に取り組んだ成果が形として残る。見て情報を得ることが難しい幼児にとって完成した作品を繰り返し触って確かめたり、作品で遊んだりすることによって、イメージを具体化し、大きさや形状、しくみなどがより実感できる。

このように、製作活動を通して幼児が経験したことや感じたこと、身につけたことが次の“知る・わかる”に繋がっていくためには、幼児が興味や関心を持ち、自分から直接働きかける活動が必要不可欠である。

そして幼児自身の見てみよう、触ってみよう、やってみようという気持ちの動きが大きな原動力になる。幼稚部では幼児が楽しく主体的に取り組みながら、“知る・わかる”製作活動を今後も模索していきたい。

自立活動学習指導案

主指導者 丸橋 由佳 (T1)
指導者 太田 景子 (T2)
杉本 見麻 (T3)
松尾 賢喜 (T4)

1. 日 時 平成 28 年 9 月 21 日 (水) 1 時限のうち 9:05~9:40

2. 対 象 小学部 2 組 児童 4 名

3. 場 所 小学部 2 組教室

4. 単元名 「朝の会」

5. 単元の目標

- 名前を呼ばれて返事をしたり、質問に答えたりすることができる。
- 教師や友だちの話を静かに聞くことができる。
- 正しい姿勢で椅子に座り、朝の会に参加することができる。
- 一日の流れを理解できる。

6. 指導にあたって

○児童観

本学級は、1年生1名、2年生1名、3年生2名の3学年4名の重複障がいのある児童が在籍している。それぞれの児童に応じて学習を積み重ねてきているが、環境の変化に敏感であり、気持ちが不安定になりやすい。どんな活動をするのか分からなかったり、苦手な活動があったりすると、不安感や抵抗感を示し、落ち着いて学習に取り組めない様子が見られる。また、睡眠の状態など、その日の体調によっても学習への取り組み方が大きく違うため、体調への配慮も必要である。一度の活動では流れを掴みにくいが、同じ活動を繰り返すことで見通しを持つことができ、抵抗感が減って、落ち着いて活動することができる。教師に促されて、言葉や声、動作などで自分の意思を表すことができるが、自発的な言葉や動作は出にくい児童が多い。歌を取り入れた活動では、自分から声を出したり、身体を動かしたりして楽しむ

様子がよく見られる。視覚に障がいがあるため、環境の把握が難しく、周囲へ関心が向きにくい。そのため、どの児童もそばにいる大人との関わりが中心となっている。

○単元観

朝の会は、日付や天気の確認、呼名、時間割や給食献立の確認を行うことで一日の流れを把握し、見通しを持って活動できるようにする目的がある。また、朝の会をきっかけとして、一日の授業をスムーズにスタートさせる役割もある。活動場所や授業の内容を事前に伝えることで落ち着いて取り組めるようにするとともに、活動に期待を持たせる。始まりや名前呼びの場面では歌を用い、楽しい雰囲気を出せるようにする。名前呼びでは呼ばれて返事をする活動とともに、友だちや教師の名前を呼んだり返事の声の聞こえを確認することで、教室に誰がいるのかを確認し、存在を意識させる。どの児童もこだわりの強い面があるため、いつも同じ流れで繰り返し行うことが、安心して授業に参加するために大切である。そのため、朝の会は年間を通して大きく変えることなく、同じ流れを進めている。毎日の繰り返しによって、安定して声や言葉を出し、やりとりの方法を定着させるとともに、教師やクラスの友だちと安定した関係を形成していく。

○指導観

日付や時間割の確認では、児童それぞれに毎回決まった質問を繰り返す。児童によって意思表示の方法が様々であるため、発問や発表の方法などを一人一人設定している。自分で考えて発表できる児童には、答えを引き出しやすい声掛けや、適切な声の大きさや声色で答えられるように声掛けを行なう。答えが出にくい場合などは、語頭を伝えたり、「はい」「いいえ」で答えられるように質問をしたりする。当番決めや名前呼びの順番は立候補で決め、自分からやりたいという意思表示をする場面とする。児童の連絡帳を読むときは児童の目の前に立つようにし、自分の話をしていることが分かるようにする。姿勢が崩れやすい児童に対しては、短い時間を設定し、その間だけ深く腰掛け、足を下に降ろして椅子に座るよう声掛けを行う。児童の様子を見て、少しずつ座ってられる時間を長くしていく。また、行事などの予定の変更がある場合は丁寧に伝えるようにしている。

7. 評価の観点

話す	<ul style="list-style-type: none"> ・名前を呼ばれて返事の声が出ている。 ・聞かれた内容に対して自分なりの表現で答えようとしている。
聞く	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の話や友だちの発表を静かに聞こうとしている。 ・教師の話をよく聞いて時間割や予定の変更など、一日の流れを理解しようとしている。
姿勢	<ul style="list-style-type: none"> ・椅子に座って参加することができる。 ・一定の時間椅子に深く腰掛け、足を下に降ろした正しい姿勢で座っている。

8. 指導計画（年間を通して指導をする。）

学習内容
<ul style="list-style-type: none"> ・着席、当番決め ・朝の会の歌、挨拶 ・日付、曜日、天気の確認 ・呼名、出欠確認 ・時間割の確認 ・給食の献立発表 ・終わりの挨拶

9. 本時の目標

- 返事や発表の声を出すことができる。
- 選択肢の中から選んだり、自分で考えたりして意思表示ができる。
- 静かに話を聞くことができる。
- 一日の流れを理解できる。
- 一定の時間椅子に座っていることができる。

10. 各児童の実態と本時の目標

児童名	児童の実態	本時の目標
A児	1年男児、全盲 喃語のような声を出すことができる。好きな曲のフレーズを歌うこともある。返事や発表などの声は出にくいですが、教師に促されて声が出ることも増えてきた。自分の肩を叩いて	<ul style="list-style-type: none"> ・声を出して返事をする事ができる。 ・提示された選択肢の中から

	<p>返事をし、「はい」「いいえ」を示すことができる。選択肢を示すと、どちらも返事をしたり、またはしなかつたりすることもあるが、どれか一つを自分で選ぶことができることもある。目の前や隣に教師が立ち、はっきりと自分に話しかけられていることが分かると、返事ができることが多い。</p> <p>睡眠の状態や体調によって、特に1時間目の朝の会の時間などに気分が乗らず、学習に集中できない様子がよく見られる。気分が高揚したり、気持ちが不安定で怒っていたりするときは、立ち上がって飛び跳ねたり、回り始めることもあるが、基本的には落ち着いて椅子に座っていることができる。</p>	<p>自分で選んで、意思表示をすることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・落ち着いて席に座り、返事や発表をすることができる。
B児	<p>2年男児、弱視</p> <p>好きな歌やおもちゃの音などをまねてよく歌っている。朝の会の歌はよく覚えており、機嫌が良いと歌いながらリズムに合わせてタンバリンを叩くことができる。</p> <p>喃語のような声を出すことが多いが、気に入った言葉を繰り返したり、教師の言葉をまねして声を出したりすることも少しずつ増えてきている。朝の会などでよく使う繰り返しの言葉などは、歌のように音階をたどって教師と一緒に声を出すことができつつある。</p> <p>返事や発表の声が出にくい、機嫌が良いとタイミング良く声が出ることもある。</p> <p>座位が不安定で椅子に座っていることが難しいが、座位保持椅子では安定して座っていることができる。しかし、床を蹴って後ろに椅子を傾けようとすることもあるため見守りが必要である。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教師と一緒に返事や発表の声を出す。 ・一部でも歌を歌ったり、みんなと合わせて声を出したりして、楽しく朝の会に参加することができる。
C児	<p>3年女児、弱視</p> <p>表出する言葉が増え、理解言語も広がってきている。教師の言葉の語尾を繰り返したり、</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・声を出して返事をするることができる。

	<p>短いフレーズや単語の並びを覚えて自分で言ったりする。自分から「する」「しない」を伝えたり、もう一度やりたいときは「もっかい」と言ったりなど、場面と言葉を関連付けて言えることもある。朝の会では決まった言葉を繰り返し使うため自分で言える部分が増えてきている。</p> <p>嫌なことがあったり、期待していた活動ができなかったりすると怒りだし、気持ちの切り替えに時間がかかることが多いが、声掛けにより落ち着くことも少しずつ増えてきた。</p> <p>椅子に座っていることが難しく、すぐに姿勢を崩してもたれてしまうが、姿勢を正すよう声を掛けると短時間だが座っていられることもある。名前呼びの間だけなど、短い時間を設定し、少しずつ座っていられる時間を長くしていけるように取り組んでいる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・聞かれた内容に合った言葉や声を出すことができる。 ・名前呼びの間、椅子に深く腰掛けて座っていることができる。
D児	<p>3年男児、全盲</p> <p>二語文で簡単な会話ができる。教師に向かって積極的に話そうとしている。言葉にこだわりがあり、気に入ったフレーズを教師に言ってもらおうように求めることが多い。言ってほしい言葉が返ってこないと不安定になることもあるが、声掛けで切り替えることができつつある。</p> <p>朝の会において昨日や今朝の出来事に関して教師に質問されると、少しずつ自分の言葉で話そうとし始めている。まだ教師の言ったことを繰り返したり、毎回同じ言葉で答えたりすることも多いが、聞かれたことに対して自分で考えて答えることができることもある。</p> <p>急な予定の変更やいつものルーティンと違うことがあると不安定になることがあるが、</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の問いかけを聞いて、経験したことを話すことができる。 ・日付や時間割を発表することができる。 ・椅子から立ってしまったときは、教師の声掛けを聞いて自ら席に着くことができる。

	<p>朝の会で一日の流れを確認させることで落ち着いて取り組むことができる。</p> <p>楽器などの物を持つときに、放り投げるようにして手を離してしまうことが多かったが、朝の会の名前呼びの歌で叩くタンバリンなどを、自分からそっと床に置くことができるようになりつつある。</p> <p>主指導の教師に話しかけたり、立ち上がって近付こうとしたりしてしまうことがあるが、声掛けで自ら席に着くことができることも増えてきている。</p>	
--	---	--

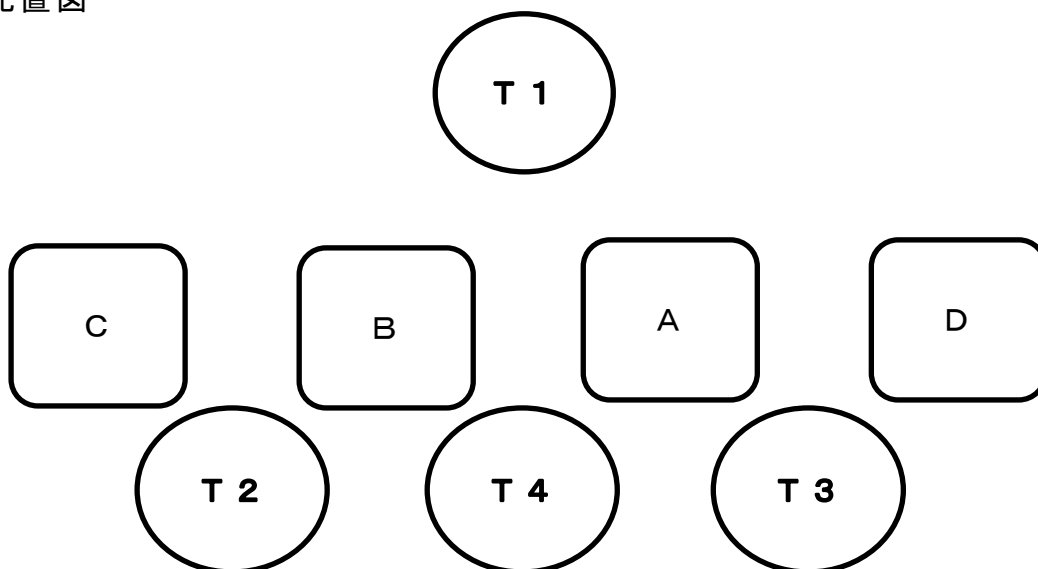
11. 本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点	準備物
9:05	<p>○朝の挨拶をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その日の当番を決める。 ・朝の会の歌を歌い、当番の号令で挨拶をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・その週、すでに当番をした児童を確認し、まだしていない児童が立候補できるように問いかける。(T1) ・みんなで一緒に声を合わせて歌ったり挨拶の声をしたりできるように声掛けをする。 	ピアノ
9:10	<p>○日付、曜日、天気の確認をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人ずつ日付と曜日と天気を発表する。 <p>○名前呼びをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・名前を呼んでもらうために、立候補をする。 ・当番は「○○さんの歌をお願いします」 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童によって質問の方法を変え、発表ができるように促す。 ・みんなと合わせて声を合わせるように声掛けを行なう。 ・立候補で順番を決めるようにする。(T1) ・立候補の声が出にくい児 	

	<p>と号令をかける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一人ずつタンバリンを叩きながら名前呼びの歌を歌い、名前を呼ばれたら返事をする。 ・昨日の出来事や放課後の予定を発表する。 ・友達の発表を聞く。 ・出欠の確認をする。 ・先生の名前呼びをする。 <p>○今日の予定を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時間割を確認する。 	<p>童に声掛けを行なう。(T2、T3、T4)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タンバリンを持っていることが難しい児童には教師が支持するようにし、投げたり口に入れたりしないように見守りを行う。 ・正しい姿勢で返事ができるように声掛けを行う。(T2、T3、T4) ・連絡帳を読んだり、連絡帳の内容から質問したりして、昨日の出来事や放課後の予定を発表できるようにする。(T1) ・連絡帳を読むときは児童の目の前に立つ。(T1) ・姿勢が崩れたときは、「座る」「足を下ろす」など児童に分かる短い言葉で声を掛け、姿勢を正すように促す。(T2、T3、T4) ・欠席している友だちはいるかどうか質問し、「います」「いません」など簡単な言葉で一人ずつ確認できるようにする。(T1) ・一人ずつ児童の前に立って挨拶する。 ・時間割を一人ずつ発表させる。(T1) ・答えが出にくいときは、授業で用いている音楽を歌ったり、授業の内容を話し 	<p>ピアノ タンバリン</p> <p>児童の連絡帳</p>
--	---	--	------------------------------------

	<ul style="list-style-type: none"> ・給食の献立を確認する。 	<p>たりする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行事や予定の変更がある場合はここで確認するようにする。(T1) ・当番ともう一人の児童の二人で、日めくりの給食カレンダーを一枚破らせる。 ・教師の読む後に続いて声を出すように促す。(T2、T3、T4) ・献立を聞いて、主食がパンであるかごはんであるかを考え、発表させる。 	給食カレンダー
9:35	<ul style="list-style-type: none"> ・終わりの挨拶をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・当番の言葉に合わせて終わりの掛け声と挨拶をするように促す。 	ピアノ

12. 配置図



○研究協議

- ・話し方、声の大きさが良かった。
- ・一人ずつ前に立って話しかけていたのが良かった。
- ・TTの先生も雰囲気明るく盛り上げていたのが良かった。
- ・給食献立のメニューなど、児童に分かるように説明をする方が良い。主食は何かを聞くときも、みそ汁だから、など理由を説明して、児童が考えられるように。
- ・連絡帳を読むときは、書かれていることを全て読むのではなく、内容を精査して共有して楽しい内容を伝えるほうが良い。また、内容が他の児童にも伝わるように掘り下げて説明したほうが良い。内容について、他の児童に広げる問いかけをしても良い。
- ・早口になってしまっている部分があった。
- ・突発的な児童の動きへの対応。
- ・1対1ではなく、他の児童も参加してみんなでしている雰囲気作りをしていくべき。
- ・話し出してしまう(授業に関係のないことなど)児童への対応。
- ・同じ内容の中でも、児童に合わせて新たな課題を加えたり、児童の実態に合わせた手立てを付け足したりしていくことも大切。
- ・他の児童の待ち時間が長くなってしまっている。
- ・全員の視線が同じ児童に向いてしまわないように気をつける。
- ・主指導者の言葉や活動内容に集中できる程度の声かけを。
- ・同じルーティンで行なう授業は授業力につながりにくい。
- ・同じ流れの中でも、動きのある授業を展開していく必要がある。
- ・児童それぞれに評価の観点をもとに評価をし、教員間で共有していくことが大切である。
- ・教師とのスキンシップ、名前の呼び方等、そこにどういう意図があるのか分かって行うことが大切。
- ・普段は名前や愛称で、授業中は名字にさん付けで、など切り替えのために呼称を変える手法もある。
- ・同じ流れでずっと行っている授業なので、四月から現在までの学習の様子、成長した部分、変えてきた部分などの記載があると良かった。
- ・児童一人一人の評価の観点を詳しく記載したほうが良い。配慮のポイント、一番重点を置きたい目標など分かりやすく記載すると良い。
- ・評価の観点を書く際には、児童に合わせて段階を設定し、分かりやすく記載する。

数学科学習指導案

指導者 中林 輝一
教科指導教諭 藤原 優子
指導教諭 岡村 聡

1. 日時 平成 28 年 11 月 25 日 (金) 第 5 限 (1 3 : 3 0 ~ 1 4 : 2 0)

2. 対象 中学部 1 年 (男子 2 名)

3. 場所 中学部 1 年教室

4. 単元 合同な図形

5. 指導にあたって

(1) 単元観

生徒は、これまでに正方形や正三角形を真ん中で二つに分けると、形も大きさも同じ図形が出来ることを学習しており、「ぴったり重なる同じ形」という感覚をもっている。本単元では、小学 4 年生までの図形領域で学習した辺や角など図形の構成要素に着目しながら「ぴったり重なる同じ形」を考察し、合同の意味や性質を理解していく。単元を通して、合同な図形を「ぴったり重なる同じ形」→「形や大きさが同じ図形」→「対応する辺の長さや角の大きさが等しい」へと段階をおって徐々に分析的にとらえることができるような活動を工夫していく。

(2) 生徒観

特例 1 課程 2 名のクラスである。小学部では、個々で算数の学習をしていたが今年度は一緒に学習をしている。授業に対する取り組みは積極的で、自らの考えを発表したり、意欲的に質問する姿がよく見られる。授業は、作成したプリントや教具を中心に学習を進めている。問題を読ませたり、発表させることで集中力を持続させている。

生徒 A

男子 全盲（先天性緑内障、先天性網膜剥離、強膜化角膜、スタージ
ーウェイバー症候群）点字使用

そろばんでの加減乗除の計算は身に付いており、計算問題には積極
的に取り組む姿が見られる。図形の学習では、ブロックなどの教具に
関心を示し、意欲的に取り組む姿がよくみられた。教具の説明をする
際は、手を誘導するなどして丁寧に指導していきたい。

生徒 B

男子 両眼先天性緑内障

視力 右 0.005 左 手動弁 最大視認力 0.05-0.5 cm

点字使用

算数の学習には、積極的に取り組んでいる。そろばんでの計算では、
2桁÷1桁の計算に苦手意識をもっているため、計算力の向上が課題で
ある。図形の学習では、ブロックや折り紙などを注意深く触察し、意
欲的に取り組む姿がみられた。

（3）指導観

本時の指導にあたっては、2つの図形の関係に着目し、「2つの図形が
ぴったり重なり合う」とき、2つの図形の関係は「合同である」ことを、
実際に図形を作成・操作させることで理解させたい。これまで折り紙や
ブロックを重ねるなどの操作を通して図形を学習してきた。これらの経
験を活かしながら学習を進めることを大切にしていきたい。また、この
単元の学習は、中学校での図形の合同や図形の相似の学習にも発展し、
論理的思考力を育む単元となるため、確実な定着をはかりたい。

6. 単元の目標

- ・ 図形の合同の意味や合同な図形の性質などを理解し、合同な図形
を弁別することが出来る。
- ・ 合同な図形を作成することができる。

7. 単元の評価規準

関心・意欲・態度	技能	知識・理解	見方・考え方
合同な図形の学習を通して、基本図形の性質を見直したり決定条件をとらえたりしようとする。	辺の長さなどを調べ、合同な図形を弁別することができる。	合同な図形では、対応する辺の長さや角の大きさは等しいことを理解する。	図形の形や大きさは辺の長さや角の大きさに決まることをとらえる。

8. 指導計画（全4時間）

日	ねらい	主な学習活動	評価規準
11/25(金) 本時 第1時	ぴったり重ねることが出来る図形は、合同な図形ということを理解する。	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな三角形を作成する。 ・合同な図形を弁別する。 ・「合同」の意味を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・合同な図形を弁別できる。 <p>【技能】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・図形の合同の意味を理解している。 <p>【知識・理解】</p>
12/2(金) 第2時	対応する辺の長さや角の大きさについて調べることを通して、合同な図形の性質を理解する。	<ul style="list-style-type: none"> ・合同な図形について、重なり合う頂点、辺、角を調べる。 ・「対応」の意味を知る。 ・合同な図形の性質を考え、それをもとに合同かどうかを判別する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・辺の長さや角の大きさに着目し、合同な図形の性質について考えている。 <p>【見方・考え方】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・合同な図形の対応する辺の長さや角の大きさは等しいことを理解している。 <p>【知識・理解】</p>

<p>12/5 (月) 第3時</p>	<p>合同な三角形をつくるために必要な辺・角がわかり合同な三角形を作成する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・作成の方法を確認し、実際に三角形を作成する。 ・3つの辺、3つの角すべて測らなくても合同な三角形を作成できることを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・必要な辺の長さや角の大きさが分かれば、合同な三角形を作成できることが分かる。 【見方・考え方】 ・必要な辺の長さや角の大きさを調べ、合同な三角形を作成する。 【技能】
<p>12/7 (水) 第4時</p>	<p>既習事項の確かめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・復習問題(プリント) ・図形の作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・既習事項を理解している。【知識・理解】 【技能】

9. 本時の展開

(1) 題材名

「 合同な図形 ～同じ形をみつけよう～ 」

(2) 本時の目標

- ・ 図形の合同の意味や合同な図形の性質などを理解する。
- ・ 合同な図形を弁別することが出来る。

(3) 展開

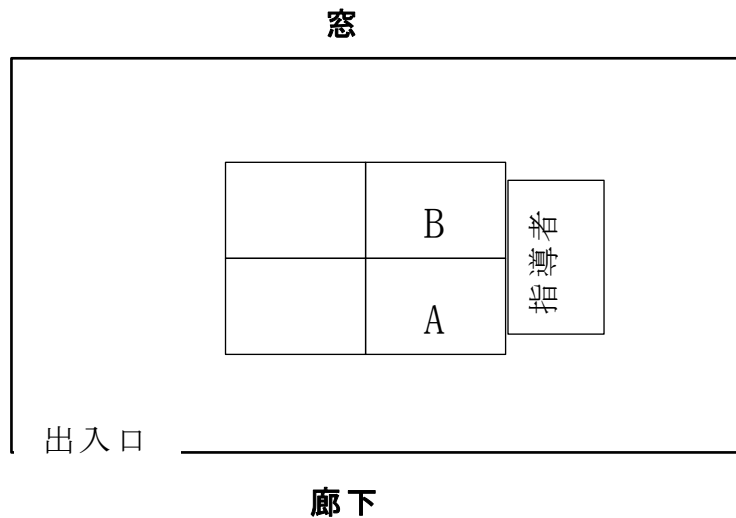
	学習活動	指導・支援	評価規準
導 入 15 分	計算問題 (そろばん)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 口頭で問題を伝える。 ・ 教材を配布する。 ・ 教材の説明をする。 	計算問題にすすんで取り組む。 【関心・意欲・態度】
	本時の課題を理解する。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 三角形を作成しなさい。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒に配布した教材と同じものを使って作成した見本を提示する。 ・ 作成した三角形で頂点、辺、角の大きさを確認する。 ・ 三角形であれば頂点も辺も角も3つであることを確認する。 	説明を聞き、図形を作成する。 【関心・意欲・態度】

展 開 25 分	できるだけ多くの種類の三角形を作成する。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">いろいろな種類の三角形を作りなさい。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 4種類の棒を9本ずつ配布し、いろいろな種類の三角形を作成させる。 ・ 作成した三角形の名前を確認する。 (正三角形・二等辺三角形) ・ 相似な三角形を作成した場合は、今後学習することに触れる。 	既習事項をもとに図形を作成する。 【技能】
	提示された三角形と同じものを見つける。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">次の三角形と同じものを見つけなさい。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 指導者が作成した三角形を提示し、生徒に作成した三角形の中から同じものを見つけさせる。 	同じ三角形の見つけ方を考える。 【見方・考え方】
	同じ三角形の見つけ方を共有する。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">どのようにして同じ三角形をみつけたか。</div> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の考えを発表させる。 	見つけ方を発表する。【関心・意欲・態度】
ま と め 10 分	本時のまとめ 次回の授業予告	<ul style="list-style-type: none"> ・ ぴったり重ねることが出来る図形は、合同な図形ということを確認する。 ・ 合同な図形を作るには、同じ部品が必要であることを確認する。 	合同な図形の意味を理解する。 【知識・理解】

(4) 準備物

図形構成学習セット (内田洋行)

10. 座席表



○研究協議

- ・そろばんの計算で、計算の答えと生徒が好きな電車を関連付けて取り組んでいる点は良かった。
- ・展開部分の合同な三角形を見つける活動では、生徒 B が合同な図形を早く見つけ、生徒 A は見つけるのに時間がかかっていた。生徒 B から生徒 A へヒントを出すような展開も良かったのではないか。
- ・各場面とも、おおむね設定した時間通り進めていたが、展開部分で三角形を複数作成する活動に時間をとり過ぎ、間延びしていたように感じた。
- ・教材の 4 種類の棒を、1～4 の点字シールを貼って区別していたが、1 のシールを貼った二本の棒の長さの合計と 2 のシールを貼った棒の長さが同じでないのなら、数字ではない点字シールで区別したほうが良かったのではないか。
- ・生徒が意欲的に三角形を作成していたので、教材選択は良かったと思う。
- ・じっくり取り組める教材を選んでいたと思う。

国語科 現代文 学習指導案

指導者 吉岡 直也
指導教諭 大島 磨智子

1. 日時 平成 28 年 11 月 30 日（水）第 6 限（14:30～15:20）
2. 対象 高等部本科普通科 3 年 A 組（男子 2 名、女子 1 名）
3. 場所 高等部本科普通科 3A 教室（A 棟 3 階）
4. 単元 小説 1 「生のかたち」
東京書籍 新編現代文 B 村上春樹『カンガルー日和』
（pp. 229-238）
5. 指導にあたって

（1）単元観

高等学校国語科の科目である「現代文」の目標は、「近代以降の様々な文章を的確に理解し、適切に表現する能力を高めるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を深め、進んで読書することによって、国語の向上を図り人生を豊かにする態度を育てる。」として高等学校学習指導要領に示されている。本科目においては、総合的な言語能力を養うため、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことについて相互に密接な関連を図った上で、効果的に指導することが求められる。

本教材は、作品の時代・テーマが偏ることなくバランスよく配列されているので、「近代以降の様々な文章を的確に理解」する能力を高めることができる。また、評論、小説、随想を軸に、さまざまなジャンルの文章に触れることができるように配慮されている。本校において本科目は 2 年次・3 年次の分割履修を行っており、2 年間でジャンルを偏らせることなく、評論、小説、随想などを均等に取上げている。

本時は前時まで取り上げていた小説『カンガルー日和』のまとめを行う。本教材の中で作者村上春樹が用いる比喩表現を取り上げ、同作者の別作品とも比較をし、その特色を捉えさせる。その活動の中で、「自分自身であればこのような比喩表現を使う」と考えさせることにより表現の幅を広げ、実生活に反映ができるよう指導していきたい。

（2）生徒観

本クラスは 3 名で構成されるクラスである。

授業への取り組み姿勢は、教員の話をしっかり聞いて考えることができているが、発問に対しては積極性が見られる生徒と、考え込んでしまう生徒に二分される。考え込んでしまう生徒に関しては、質問さ

れたことに対して正解かどうかの自信が持てず、なかなか発言に結びつけることができないからだと考える。

書字については、墨字1名、点字2名であり、点字の2名はパーキンスを使用している。墨字使用者は教科書に書き込むことができる程度の視認力がある。点字使用者1名については誤字脱字マス空け間違いが多く見られるため、注意と声掛けが必要である。

読解のスピードにも差があり、点字使用者のなかでも差があるため、通読した後に再度指導者が範読することで、文章をより深く理解させている。墨字使用者は拡大文字の教科書を使用しており裸眼で読むことができるが、漢字の読みに課題が見られることが多くある。

〈生徒の実態〉

	A (男子)	B (男子)	C (女子)
視疾患 視力	視神経コロボーマ・外斜視 R-0.1 L-0.3 1.0-2cm	網膜色素変性症 R-0.01 L-0.02 0.15-5cm	無眼球症 R-0 L-0
使用文字	ゴシック 20p	点字	点字
使用教科書	拡大教科書	点字教科書	点字教科書
読むこと	・漢字の読みが確実でないときがある。 (中学1年程度の読み) ・文脈に沿った読みができる。 ・行間を読むことが苦手。	・点字の読みが少し遅く、読み間違いがしばしばある。 ・文脈に沿った読みができる。 ・行間を読み、自分なりの考えをもって発問に答えることができる。	・点字の読みが速い。 ・文脈に沿った読みができる。 ・行間を読むことが苦手。
書くこと	・墨字使用。ノートに授業の要点や板書を書き込める。 ・漢字の書き取りでは細部への注意力が乏しく、書き間違いが多い。漢字検定4級所持。	・点字使用。主にパーキンスを使って書く。 ・点字の誤字・脱字・不正マス空けが多く、書くことに対して丁寧さが必要。	・点字使用。主にパーキンスを使って書く。 ・点字の誤字・脱字・不正マス空けが少なく、ほぼ正確に書くことができている。

話すこと・聞くこと	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の思ったことや考えを話すことが苦手。 ・他者の意見をよく聞き、それをもとに考えを発展させることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを積極的に発言することができる。 ・他者の意見をよく聞き、話し合いなどでは中心になって進めることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の思ったことや考えを話すことが苦手。 ・他者の意見をよく聞き、それをもとに考えを発展させることができる。
関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書に直接書き込んだり、ルビを振ったりして学習しようとする姿勢がうかがえる。 ・指導者の発問に対して自身が分かる範囲で答えることができている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・分からない箇所をそのままにせず、教員に聞くことができる。 ・集中力を持続させることが苦手であるが、気持ちを切り替え、授業を集中して受けようとする様子が見える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章を正しく読み取ろうとする態度がうかがえる。 ・指導者の発問に対して自身が分かる範囲で答えるできている。

(3) 指導観

本単元では、カンガルーを見るために動物園に行くという何気ないことに対する、価値観の違いが主題の1つとして設定されている。難しい語句や表現が少ない本教材は、生徒にとって比較的読みやすいものであり、場面をイメージすることも容易であると考えられる。その中で、登場人物の会話文や行動から心情を読み取らせ、最終的に主題理解へとつなげていきたい。また、作家村上春樹の特色の1つである比喩表現を取り上げ、ユニークさ・多様性を学習し、それぞれの表現の幅を広げていきたい。

6. 単元の目標

- ・登場人物である男女の心情を理解し、主題を捉える。
- ・作中で使われる比喩表現の意味を理解し、表現の幅を広げる。

7. 単元の評価規準

関心・意欲・ 態度	話す・ 聞く能力	書く能力	読む能力	知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> ・登場人物の心情を積極的に読み取る。 ・プリント学習において意欲的に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作者に関する情報を調べ、その調べたものを発表できる。 ・考えた比喩表現を発表しまた他者の発表について批評できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大事だと思う授業内容を適宜、メモすることができる。 ・自分なりの比喩表現を考え、ワークシートに書き込むことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品の場面的確にイメージすることができる。 ・作品内の様々な情報をもとに、主題を読み取ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作中で用いられている語句を理解し、その語句を用いて文章を創作できる。 ・小説という表現形式の特徴を捉え、比喩表現の多様性を理解することができる。

8. 指導計画（全5時）

	学習内容	学習活動
第1時 （11月10日実施）	<ul style="list-style-type: none"> ・全文通読 ・語句の確認 ・意味段落（1段落～6段落）分け ・作者についての学習 	<ul style="list-style-type: none"> ・全文を通読し、物語の大筋の内容を捉える。 ・作品で用いられている語句の意味を理解し、その語句を用いた文章を創作する。 ・場面、時間の経過などから意味段落を読み取る。 ・作者に関する情報を調べる。【宿題】
第2時 （11月14日実施）	<ul style="list-style-type: none"> ・宿題の発表 ・第1段落、第2段落解説 	<ul style="list-style-type: none"> ・宿題として出していた作者に関する情報を発表する。 ・第1、2段落の登場人物、場面をおさえ、内容を理解する。

<p>第3時 (11月17日実施)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前時の振り返り ・ 第3段落、第4段落 解説 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導者の前時に関する発問に対し、内容を思い出しながら答える。 ・ 第3、4段落に関して、登場人物の「カンガルー」に対する考え方の違いや比喩表現をおさえ、内容を理解する。
<p>第4時 (11月21日実施)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前時の振り返り ・ 第5段落、第6段落 解説 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導者の前時に関する発問に対し、内容を思い出しながら答える。 ・ 第5、6段落に関して、情景描写や会話文から登場人物の心情を読み取り、内容を理解する。 ・ 作品の内容に関する。 ワークシート【宿題】
<p>第5時 (本時)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前時の振り返り ・ 宿題の確認、答え合わせ ・ 比喩表現に関するプリント学習 ・ まとめ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導者の前時に関する発問に対し、内容を思い出しながら答える。 ・ ワークシートの答え合わせをしながら本作品の内容を再確認し、主題を理解する。 ・ 比喩表現の穴埋めでは、自由な考えで記入する。 ・ 作品の率直な感想を持ち、小説というジャンルの特徴を理解する。

9. 本時の展開

(1) 本時の目標

- ・登場人物の価値観の違いをまとめ、主題を捉える。
- ・比喩表現に関するプリント学習において、他生徒の発表や作者の比喩表現を聞くことで、表現の多様性に気付く。

(2) 評価基準

	関心・意欲 ・態度	話す・ 聞く能力	書く能力	読む能力	知識・理解
評価規準	・登場人物の心情を積極的に読み取り、プリント学習において意欲的に取り組む。	・考えた比喩表現を発表し、また他者の発表について批評できる。	・自分なりの比喩表現を考え、ワークシートに書き込むことができる。	・作品の各場面を的確にイメージし、主題を読み取ることができる。	・小説という表現形式の特徴を捉え、比喩表現の多様性を理解することができる。
A (十分満足)	・疑問点を教員に尋ね、自ら課題解決を図ろうとしている。	・考えた比喩表現を発表し、他者の発表について批評できる。	・作者の表現に囚われることなく自分なりの表現を見つけ、ワークシートに書き込むことができる。	・作品の各場面を的確にイメージした上で登場人物の心情を理解し、主題を読み取ることができる。	・小説という表現形式の特徴を捉え、比喩表現の多様性を理解することができる。
B (概ね満足)	・課題に対して考える姿勢がうかがえる。	・考えた比喩表現を発表し、他者の発表をしっかりと聞くことができる。	・よく考えた上で、ワークシートに書き込むことができる。	・作品の主題を読み取ることができる。	・比喩表現の多様性を理解することができる。

C (要努力)	・声掛けなどの支援がなければ取り組めない。	・考えた比喻表現を発表することができない。	・ワークシートに書き込むことができない。	・作品の主題を読み取ることができない。	・比喻表現の多様性を理解することができない。
------------	-----------------------	-----------------------	----------------------	---------------------	------------------------

(3) 授業展開

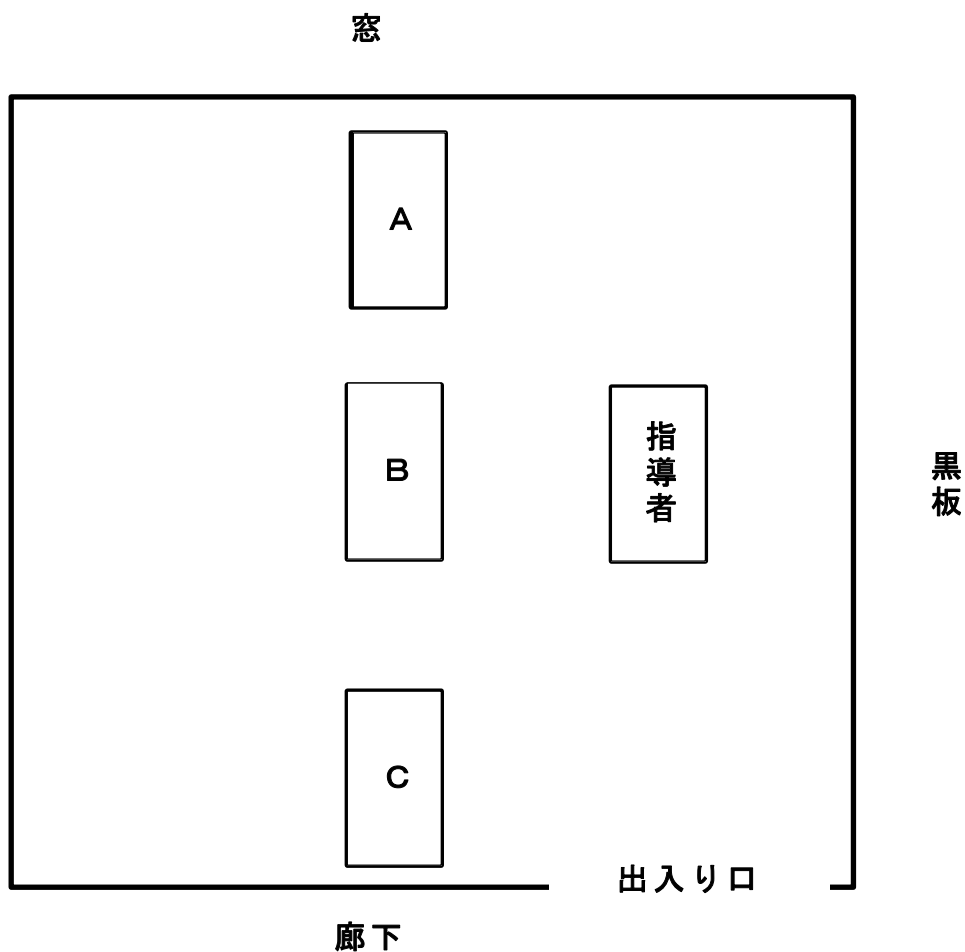
	学習活動	指導上の留意点・支援	評価規準
導入 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 始まりの挨拶 ・ 本時の説明 ・ 前時の振り返り <ul style="list-style-type: none"> ・ 宿題（生徒配付プリント① 『カンガルー日和』まとめプリント）の確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 始まりの挨拶を行う。 ・ 本時の流れを説明する。 ・ 前回に解説を行った第5、第6段落のうち、特に第6段落（pp. 237 15行目～終わりまで）の内容を中心に確認する。 <p>※内容の確認では、「場面」、「比喩表現の部分」、「登場人物の会話文」についての発問を行う。</p> <p>（指名順 A→B→C）</p> <p>発問例</p> <p>「6段落における場面はどこですか。」</p> <p>「6段落における比喩表現を答えなさい。」</p> <p>「6段落最後の会話文における『僕』『彼女』の心境はどのようなものだと思いますか。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 前時に課した宿題を確認する。 <p>※宿題を机に出すよう指示を行い、机間巡視により確認する。宿題を忘れてしまった生徒に関しては理由を尋ねた後、宿題用紙を渡して解説の際に答えを書き込むよう指示する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 登場人物の心情を読み取る【関心・意欲・態度】 ・ 作品の各場面をイメージする【読む能力】 ・ 比喩表現を理解する【知識・理解】 <ul style="list-style-type: none"> ・ プリント学習において意欲的に取り組む【関心・意欲・態度】

<p>展開 ー (10分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・宿題の答え合わせ 	<ul style="list-style-type: none"> ・設問ごとに生徒を指名し、答えさせる。(指名順 C→B→A) ・最後の設問では生徒全員に答えさせ、他生徒の答えに対しての意見をそれぞれ聞き取る。※答えを記入していない生徒に関しては、他生徒の答えを聞いての感想のみを求める。また、生徒の答えが似通っている場合はその答えの根拠となる部分を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・プリント学習において意欲的に取り組む【関心・意欲・態度】 ・他者の発表について批評できる【話す・聞く能力】 ・主題を読み取ることができる【読む能力】
---------------------------	---	--	---

<p>展開口 (25分)</p>	<p>・ワークシート(生徒配付プリント②「村上春樹の比喩表現」プリント)の記入</p> <p>・発表</p>	<p>・比喩表現に関するワークシートを配付し、解答時間を設ける。(10分)</p> <p>※早く書き終わった生徒にはそれぞれの設問において2つ以上の比喩表現を考えさせる。悩んでいる生徒に対しては、身近な情景や人物を思い浮かべさせ、記入することができるよう助言する。</p> <p>・一人ひとりワークシートに記入したものを設問ごとに発表する。</p> <p>生徒が発表したものに関して、「前後の文章や文章内における品詞から手がかりとなる部分と関連づけられているか」という点で評価する。また、各設問発表の最後には、作者の表現例を提示する。</p>	<p>・プリント学習において意欲的に取り組む【関心・意欲・態度】</p> <p>・自分なりの比喩表現を考え、書き込むことができる【書く能力】</p> <p>・考えた比喩表現を発表する【話す・聞く能力】</p> <p>・比喩表現の多様性を理解する【知識・理解】</p>
----------------------	--	---	---

<p>まとめ (5分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本作品、作者についての感想を発表する ・ テスト範囲の連絡及びテスト後の予定連絡 ・ 終わりの挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習活動を通して本作品、作者についての様々な意見を聞き取る。 ・ 2学期末テスト範囲は本作品のみから出題されること、テスト後はテストの解説を行った後、随想『カフェの开店準備』(pp. 242-pp. 247)を授業で取り扱うのであらかじめ読んでおくことを伝える。 ・ 終わりの挨拶を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小説という表現形式の特徴を捉える。 <p>【知識・理解】</p>
---------------------	---	--	--

10. 座席表



○研究協議から

(他教員からのアドバイス・感想)

- ・ 参観に来た教員にだけワークシートの間に対する答えを聞くのではなく、前もって何人かの教員から答えを集めて授業を実施すれば、より多角的な意見をもとにした授業が行えたのではないか。
- ・ 発問に対し、問いに対する理由をもう少し掘り下げて聞いた方が良かった。
- ・ 生徒は比較的にリラックスし、授業を受けることができていた。

『カンガルー日和』まとめプリント

以下の問いに答えよ。

問一 意味段落1（墨字教科書 229 ページ）「これは誇張ではない。本当にそうなのだ」という語りかけは、誰に対して、どのような効果があるか答えよ。

問二 カンガルーの赤ん坊を見に行くことに対しての「僕」、「彼女」の価値観の違いが分かる会話文をそれぞれ意味段落3（墨字教科書 231 ページ）232 ページ）から抜き出しなさい。

問三 意味段落5（墨字教科書 236ページ〜237ページ）「それはすてきな眺めだった。」とあるが、その「眺め」は、なぜ「すてき」だと言えるのか。その理由を説明した次の文の空欄に入る言葉を、本文中から抜き出せ。

赤ん坊カンガルーが母親の袋に入っている眺めは、子どもを（ ）しようとする母親の気持ちの表れだと思われるから。

問四 この作品における主題は何だと考えるか。自由に答えよ。

[]

「村上春樹の比喩表現」プリント

問 以下の文章における空欄にあてはまる比喩表現を自由に答えよ。

「まるで」

（のように

軽そうなカーディガン」

（『国境の南、太陽の西』より。主人公の「僕」が小学校の同級生に久々の再会を果たした時に、その同級生が着ていたカーディガンに対する比喩表現。）

「顔を洗うのにすごく長い時間がかかる。

（ ）という気がするくらいだ。」

（『蛍・納屋を焼く・その他の短編』より。主人公「僕」の学生寮における几帳面な同居人に対しての比喩表現。）

「私の部屋のドアや金庫の鍵を開けることなんて
プロの手にかかれば

（

）するくらいの

時間しかかからない。」

（『世界の終わりとハードボイルドワンダーランド』
より。主人公の「私」が自分の家のセキュリティ
に不安を抱き、重要書類を家から持ち出す際の比喩
表現。）

「学力向上のための課題学習」の取り組み

高等部 尾方剛

1 はじめに

職業自立を目指して理療科で学習する生徒にとって、卒業時にあん摩マッサージ指圧、はり、きゅう国家試験に合格することは、誰もがクリアしなければならないハードルである。これまでも、定期試験で欠点となった科目の再試験の実施、放課後や長期休業中の補習、3学年での計4回（理教連模擬試験含む）の校内国家試験模擬試験の実施等、生徒も教職員も理療科全体で合格を目指して取り組んできたが、合格に至らなかった生徒がいることは事実である。

このような現状を踏まえ「日常の学習習慣の獲得が生徒の学力向上に結びつくのではないか」という意見が出され、平成26年6月から新たに「学力向上のための課題学習」に取り組み始めることとなった。

2 試験実施、成績評価、国家試験合格状況

1. 試験実施

(1) 定期試験

平成16年度から平成26年度までは2学期制であったため、前期の中間・期末、後期の中間・期末の4回の定期試験を実施。

平成27年度以降は、以前の3学期制とし、1学期の中間・期末、2学期の中間・期末、3学期の期末の5回の定期試験を実施。

(2) 再試験

平成24年度から平成26年度は、定期試験の素点が49点以下の場合には本試験終了後2週間～4週間の間に再試験を実施。

平成27年度は1学期・2学期の中間試験に限り定期試験の素点が49点以下の場合には本試験終了後2週間～4週間の間に再試験を実施。

(3) 国家試験模擬試験

変遷はあるが、現在は以下の4回実施。

第1回校内模擬試験...あん摩、はりきゅう共通。1、2学年に習得した領域から100問。4月下旬。

第2回校内模擬試験...あん摩、はりきゅうそれぞれ実施。1、2学年に習得した領域からあん摩150問、はりきゅう160問。8月下旬。

理教連模擬試験...11月中旬。

第3回校内模擬試験...あん摩、はりきゅうそれぞれ出題数を最新の国家試験に準じて、1月上旬に実施。

(4) 実力試験

平成22年度まで、各科1、2学年において、2月上旬に実施。該当学年の学習対象科目において、その時点での進度における全範囲で実施したが、出題形式は四者択一に統一はしていなかった。

平成28年度より、各科2学年において、1学年の学習定着度を図ることを目的に、前年度の課題学習の中から解剖学50問、生理学50問で4月下旬に実施。

2. 成績評価

前期・後期または各学期並びに年間で、定期試験を基にそれぞれ100点法で評価する。欠点は、平成23年度までは39点以下としていたが、国家試験の難易度上昇との関係で各科目の修得度合の引き上げも必要と考え、平成24年度より欠点を49点以下と変更した。併せて進度進行に沿って確実な知識習得を目指し、欠点の生徒には再試験を実施し、知識習得に結びつくよう取り組んだ。しかし、再試験に照準を合わせるなど再試験に頼り過ぎ、知識定着に十分な効果がみられるとはいえなかった。本試験に集中させる指導をとということで、廃止を検討しつつ、3学期制になった平成27年度は1、2学期の中間試験時のみ再試験を実施し、平成28年度から再試験制度は廃止した。

3学期制の復活は、定期試験の回数を増やすことで、細かい範囲での学力の定着を図ることと、より早期に問題点を把握し指導に当たることが重要と考えたことによる。

3. 卒業時における過去6年間の国家試験合格状況（資料1参照）

3 課題学習の実際

1. 目的

卒業時に国家試験100%合格を目指し、生徒の学習習慣の獲得と学力の向上を図る。

2. 設定の経緯

学習した知識の確実な習得と定着、さらに応用につなげるためには、日頃より反復学習による学習内容の確認が必要である。平成 25 年度末にその具体的手段の検討を行った。

その中で、毎朝の 1 時限開始前を使ってクラス担任の指導による、解剖学や経穴に関する内容について事前に課題を呈示し、生徒個々に対する発問と応答形式による実施を考えた。しかし、個々の通学事情や連絡事項などを鑑みると困難があるとの結論になり、検討を重ねた結果以下の内容で平成 26 年度より取り組み始めた。

科目については、他の科目の基礎となる科目であり全学年共通で取り組むために、解剖学、生理学とし、単年度で検討しつつ、現在同科目での 3 年目の実施となっている。また、毎回の問題数は、通年継続することを念頭に 5 問が適当だと判断した。

3. 内容

宿題形式による課題学習と、その解説。

4. 課題の科目、形式、種別及び実施方法

- (1) 科目：解剖学、生理学
- (2) 形式：四者択一問題 5 問
- (3) 種別：点字又は墨字（16 ポイント）に加えて、希望により DAISY-CD を配付
- (4) 実施方法：毎週火曜日に解剖学、金曜日に生理学を配付
平成 26 年度：前期中間試験以降、6 月下旬から翌年 2 月中旬にかけて、解剖学・生理学ともに No 1 ～ No24、計 120 問の課題を作成・配付
平成 27 年度：第 1 学期中間試験以降、5 月下旬から年度末までに、解剖学・生理学ともに No 1 ～ No29、計 145 問の課題を作成・配付
平成 28 年度：第 1 学期中間試験以降、5 月下旬から年度末までに、解剖学・生理学ともに No 1 ～ No30、計 150 問の課題を作成・配付予定

5. 主な役割分担

理療科教員 10 名を解剖学班 5 名と生理学班 5 名に分け、それぞれを

問題・解答の作成（2名）、墨字問題の編集と印刷、点訳と印刷、DAISY-CDの録音とコピーに役割分担し、課題の作成・配付を行う。また、採点と解説については各クラス担任が行う。

4 成果の分析

1. 問題作成に関して

- (1) 過去の国家試験や理教連模擬試験も参考にしながら、それだけに囚われず、一部教科書を参考に重要と思われる部分から独自に作成している。その際、他校で独自に作成している問題なども参考に必要な内容について調べている。
- (2) 国家試験の内容を再検討できるとともに、教科書の内容も再確認し、新たな知識の獲得に結びつき、指導内容が深まる。また、他校が独自に作成する問題の内容を含め検討することで、新たな研究に結びつく。
- (3) 指導法に直結する点では、作成科目の指導と知識習得・定着に十分発揮できる。また、作成科目以外の科目の指導内容にも結びつく点が含まれる。
- (4) 3年間の出題難易度に統一性がない。その理由として教科担当者が固定されていないことや、必ずしもその年の教科担当者が作成していたとは限らないことから生じている。
- (5) 開始当初、目的の1つに保健理療科生徒の合格引き上げが含まれ、難易度を高くしないよう考えていた。一方、保健理療科は平成27年度より、それまでの「大阪市立盲学校」作成の「解剖学」「生理学」の教科書に変えて理療科で使用している「日本理療科教員連盟教科書委員会編」の「解剖学」「生理学」の教科書に合わせたので、問題レベルが上がるなどの影響が出た。

2. 解答・解説並びに教科指導に関して

- (1) 解答と解説は、昼休み1回を使う、授業中、週1回のホームルーム、などで行っており、全クラス統一の形は取れていない。提出させ正誤をチェックしているか、提出させていないかも統一性はない。
- (2) 解答するに当たり、今まで知らなかった内容の新たな研究、教科書の全内容に関する改めての研究、問題に連動する内容を含めた新たな研究などに結びつく。
- (3) 課題学習対象科目の内容取得、知識定着、国家試験合格のための

知識定着にある程度結びつく。

- (4) 効果として、反復学習による定着、学年を超えての知識定着、生徒の学力不振や学習上の問題点の早期の把握、2 学年における基礎学力補充の対策や3 学年における国家試験対策、などに役立つ。また、生徒においては、分からないことを調べる習慣に役立つ。
- (5) 課題学習以外の科目の内容の参考になったり、理解を深めるための基礎知識となったりする。
- (6) 現在の実施状況においては、知識定着のための内容や、国家試験対策に役立てることができる反面、全ての内容を満たすには回数や問題数が不十分であるともいえる。
- (7) 解答に対する解説は、作成担当者が示すのではなく、クラス担任の裁量で行われる。そのため、正答を導くための解説内容にばらつきがあることがうかがえる。

3. 生徒からの意見・要望など

- (1) 課題学習は、ほぼ全員が、大いに役立つまたはある程度役立つと答えている。その理由として、忘れていた内容について覚えなおすことができる、知識の定着に役立っている、が主で、その他、分からないことを調べる習慣がついてきた、以前よりも学習意欲が出てきた、他の科目の学習の参考になることがある、なども出されている。
- (2) 多くは毎回の課題学習において昼休みなどに解答と解説があると答えているが、対応の公平性、提出し正誤のチェックを受けるか提出していないかなどで、クラス間でばらつきがある。
- (3) 解答するに当たり、今の知識で十分解答できると答えたのはごく僅かで、多くは問題に直接関わる内容について調べている、または問題に連動する内容を含め調べていると答えている。
- (4) 実施状況において、回数、問題数は十分であるという答えが多い反面、他の科目も実施してほしい、各学年で習得する科目について実施してほしいという意見も出ている。
- (5) 希望することとして、教科別に課題学習を用意するとともに生徒の希望に応じて選択できるようにしてほしい、を始め、自宅で自由にできるようドリル方式で提供してほしい、長期休暇を利用して解説を入れながら指導してほしい、生徒の学力に応じた補習をしてほしい、などが挙げられている。

4. 試験結果からの分析

- (1) 各科 3 学年における模擬試験と各科 2 学年における実力試験でどのような成果があるかを探った。

定期試験については、形式や難易度の違いを補正できないこと、解剖学、生理学以外の科目において、課題学習との関連の裏付けがないことなどにより、分析は困難と判断した。
- (2) 各科 3 学年における模擬試験での成果に関しては、課題学習を始めた平成 26 年度以降の 3 学年の模擬試験の解剖学、生理学の平均正答率と合格ライン（正答率 60%以上）の達成率を分析したが、明らかに効果を表す方向性は生み出せなかった。（資料 2 参照）
- (3) 各科 2 学年における実力試験は平成 28 年度が最初の実施となり、結果のみ記載する。（資料 3 参照）

5 考察と今後の課題

- (1) 解剖学・生理学の課題学習を 3 年分蓄積することができ、修正を加えることで、3 年周期で教材として提供することができる。
- (2) 課題学習が、1 学年では基礎の定着に、2 学年では基礎の復習と他科目への応用に、3 学年では国家試験合格に向け、自主学習の一翼になっている。
- (3) 解剖学・生理学が、他科目の西洋医学的な分野の理解や応用の基礎的内容として役立つための、知識定着として一定の効果はある。
- (4) 国家試験における出題数は、解剖学、生理学で減っており、模擬試験での正答率や合格ライン達成率がそのまま国家試験合格に連動するとは限らないと考える。
- (5) 専門分野の出題割合が増えていることから、その分野の理解を深め応用する観点で、経穴、東洋医学の基礎を強化する内容も必要と考える。
- (6) 生徒からの全般的な意見として、復習になるので必要性を感じているといえ、併せて、それぞれの学年でそれぞれの科目に応じた同じ程度のものがあればいいと望んでいる、とうかがえる。
- (7) 回数や問題数の見直し、他の科目の実施、各学年で修得する科目を対象に実施、などの検討が早急に必要である。
- (8) 2 学年の科目を 2 年分、3 学年の科目を 1 年分の作成が必要となる。平成 29 年度には 2 学年で使用する臨床医学総論、経絡経穴概論の作成・実施が望まれる。

- (9) 各学年対象科目の実施の検討と並行して、定着度を図るための1、2学年においての実力試験の実施も検討すべきである。
- (10) 解説が誤っているなどの生徒からの指摘もあった。作成担当者が簡単な解説を作成し共有するなどの工夫も望まれる。
- (11) 授業研修の確保の不足、知識の共通認識の不足も浮き彫りとなった。教科指導における指導の統一も含めた教員側の研究・研修が必要である。特に1学年の基礎学力の定着のための教授方法の工夫が必要と考える。

6 おわりに

課題学習の取り組みを開始して3年経過時点での中間報告として、現状と今後の課題についてまとめた。

生徒の学力向上に効果があったとは、現実施期間でまだ判断できない。今後に向けて、課題の科目・形式・実施方法等について引き続き検討中である。

理療科で学習する生徒が全員国家試験に合格して職業自立の第一歩を踏み出せるよう、今後も創意工夫しながら理療科全体で努力を継続していかなければならない。

(資料1) 卒業時における過去6年間の国家試験合格状況

	保健理療科	理療科	
	あん摩	あん摩	はりきゅう
合計	16 / 29 (55.2%)	34 / 35 (97.1%)	35 / 40 (87.5%)
平成22年度	3 / 4 (75%)	2 / 2 (100%)	4 / 4 (100%)
平成23年度	2 / 5 (40%)	6 / 6 (100%)	5 / 6 (83.3%)
平成24年度	3 / 7 (42.9%)	11 / 12 (91.7%)	12 / 13 (92.3%)
平成25年度	3 / 5 (60%)	2 / 2 (100%)	3 / 3 (100%)
平成26年度	5 / 6 (83.3%)	7 / 7 (100%)	5 / 7 (71.4%)
平成27年度	0 / 2 (0%)	6 / 6 (100%)	6 / 7 (85.7%)

(資料2) 各科3学年における模擬試験結果

[平成26年度]

第1回模擬試験(問題はあん摩、はりきゅう共通)

科目(問題数)	平均正答率	合格ライン(正答率60%以上)達成率
保健理療科解剖(20問)	52.5%	33.3%
保健理療科生理(18問)	41.7%	33.3%
理療科解剖(20問)	52.1%	57.1%
理療科生理(18問)	46.8%	28.6%

第2回模擬試験(問題はあん摩用、はりきゅう用)

科目(問題数)	平均正答率	合格ライン(正答率60%以上)達成率
あん摩保健理療科解剖(29問)	77.0%	100%
あん摩保健理療科生理(26問)	74.3%	83.3%
あん摩理療科解剖(29問)	69.5%	85.7%
あん摩理療科生理(26問)	78.5%	100%
はりきゅう解剖(30問)	53.3%	28.6%
はりきゅう生理(25問)	52.6%	14.3%

理教連模擬試験

科目(問題数)	平均正答率	合格ライン(正答率60%以上)達成率
あん摩保健理療科解剖(18問)	73.1%	83.3%
あん摩保健理療科生理(16問)	62.5%	66.6%
あん摩理療科解剖(18問)	69.4%	83.3%
あん摩理療科生理(16問)	56.3%	33.3%
はりきゅう解剖(16問)	60.7%	57.1%
はりきゅう生理(14問)	64.3%	57.1%

第3回模擬試験（問題数は最新の国家試験に準ずる）

科目（問題数）	平均正答率	合格ライン（正答率 60%以上）達成率
あん摩保健理療科解剖（18問）	64.8%	83.3%
あん摩保健理療科生理（16問）	66.7%	83.3%
あん摩理療科解剖（18問）	66.7%	83.3%
あん摩理療科生理（16問）	67.7%	66.7%
はりきゅう解剖（16問）	40.2%	0%
はりきゅう生理（14問）	66.3%	71.4%

[平成27年度]

第1回模擬試験（問題はいん摩、はりきゅう共通）

科目（問題数）	平均正答率	合格ライン（正答率 60%以上）達成率
保健理療科解剖（20問）	37.5%	0%
保健理療科生理（18問）	30.6%	0%
理療科解剖（20問）	50.7%	28.6%
理療科生理（18問）	46.8%	14.3%

第2回模擬試験（問題はいん摩用、はりきゅう用）

科目（問題数）	平均正答率	合格ライン（正答率 60%以上）達成率
あん摩保健理療科解剖（29問）	46.6%	0%
あん摩保健理療科生理（26問）	57.7%	50%
あん摩理療科解剖（29問）	56.6%	42.9%
あん摩理療科生理（26問）	68.7%	85.7%
はりきゅう解剖（30問）	51.4%	42.9%
はりきゅう生理（25問）	66.3%	85.7%

理教連模擬試験

科目（問題数）	平均正答率	合格ライン(正答率60%以上)達成率
あん摩保健理療科解剖(11問)	50%	50%
あん摩保健理療科生理(11問)	59.1%	50%
あん摩理療科解剖(11問)	70.1%	85.7%
あん摩理療科生理(11問)	71.4%	85.7%
はりきゅう解剖(11問)	50.6%	42.9%
はりきゅう生理(11問)	49.4%	42.9%

第3回模擬試験（問題数は最新の国家試験に準ずる）

科目（問題数）	平均正答率	合格ライン(正答率60%以上)達成率
あん摩保健理療科解剖(11問)	54.5%	0%
あん摩保健理療科生理(11問)	59.1%	50%
あん摩理療科解剖(11問)	58.4%	57.1%
あん摩理療科生理(11問)	59.7%	42.9%
はりきゅう解剖(11問)	45.5%	28.6%
はりきゅう生理(11問)	51.9%	14.3%

[平成28年度]

第1回模擬試験（問題はいん摩、はりきゅう共通）

科目（問題数）	平均正答率	合格ライン(正答率60%以上)達成率
保健理療科解剖(20問)	38.8%	0%
保健理療科生理(18問)	44.4%	25%
理療科解剖(20問)	57.5%	50%
理療科生理(18問)	66.6%	66.6%

第2回模擬試験（問題はあん摩用、はりきゅう用）

科目（問題数）	平均正答率	合格ライン（正答率60%以上）達成率
あん摩保健療科解剖（29問）	49.1%	25%
あん摩保健療科生理（26問）	70.1%	75%
あん摩療科解剖（29問）	64.4%	50%
あん摩療科生理（26問）	87.8%	100%
はりきゅう解剖（30問）	74.8%	85.7%
はりきゅう生理（25問）	62.9%	71.4%

理教連模擬試験

科目（問題数）	平均正答率	合格ライン（正答率60%以上）達成率
あん摩保健療科解剖（11問）	72.7%	80%
あん摩保健療科生理（11問）	47.2%	20%
あん摩療科解剖（11問）	81.8%	100%
あん摩療科生理（11問）	66.2%	57.1%
はりきゅう解剖（11問）	71.4%	71.4%
はりきゅう生理（11問）	62.6%	42.9%

第3回模擬試験（問題数は最新の国家試験に準ずる）

科目（問題数）	平均正答率	合格ライン（正答率 60%以上）達成率
あん摩保健療科解剖（11問）	63.6%	75%
あん摩保健療科生理（11問）	50%	50%
あん摩理療科解剖（11問）	71.4%	71.4%
あん摩理療科生理（11問）	67.5%	71.4%
はりきゅう解剖（11問）	68.8%	71.4%
はりきゅう生理（11問）	66.2%	57.1%

(資料3) 各科2学年における実力試験結果
[平成28年度]

科目 (問題数)	平均正答率	合格ライン (正答率 60%以上) 達成率
保健理療科解剖(50問)	64.4%	60.0%
保健理療科生理(50問)	62.8%	60.0%
理療科解剖(50問)	68.0%	100%
理療科生理(50問)	73.3%	100%

寄宿舎における研究活動

寄宿舎 研究部

1. はじめに

学校教育法第 78 条 特別支援学校には寄宿舎を設けなければならない。ただし、特別の事情のあるときは、これを設けないことができる。第 79 条①寄宿舎指導員は、寄宿舎における幼児、児童又は生徒の生活上の世話及び生活指導に従事する。となっている。本校の寄宿舎は明治 33 年開校当初より寄宿舎は設けられている。しかし、全国的に見ても聴覚・視覚支援学校のみにはしか寄宿舎がないのは大阪府だけである。

昭和 54 年養護学校が義務化されて以降は、盲学校（当時の名称）へも多種多様な障がいを併せ持つ子どもたちが入学してきた歴史があり、本校寄宿舎においても肢体障がい・知的障がい・聴覚障がい・発達障がいなどを併せ持つ児童・生徒が入舎し、舎生の様々な障がいを理解するために研究活動を積み重ねてきた。研究紀要においても第 1 集（昭和 43 年発行）より寄宿舎の実践報告が記載されている。

2. 寄宿舎の研究活動

寄宿舎の中で研究・研修活動は重要視しており、校務分掌の研究部・舎内の研修担当を役割分担し活動している。

（1）校務分掌・研究部の位置づけ

校内の分掌である研究部に所属し、学校全体の役割を担う。

ここ数年は校内新転任研修において、パソコン室 点字プリンターの使い方の講師を行っていた。今年度は学校案内・寄宿舎の概要及び見学を行い、寄宿舎の果たす役割を教職員に伝えた。

（2）舎内研修の位置づけ

各担当者が担当している舎生の部の枠を超え全員で共通理解する。年度当初に年間研修計画を立て実施する。

＜研修の柱＞

- ・多様な障がいや年齢層の児童・生徒理解にむけて事例研修会を行い、生活教育の専門性向上に努める。
- ・各担当の実践について総括会議を実施し、共通理解できる場を設定する。

- ・児童・生徒の健康面、視覚障がい教育について学び、相互理解をはかる。
- ・発作などの緊急対応を想定し、シミュレーションを（医療的ケア委員会と連携）定期的に行う。

＜平成27年度 研修計画＞

- 緊急シミュレーション 3回（4月・7月・1月）
- 健康面について配慮が必要な子どもについて（5月）
- 1学期の実践総括（7月）
- 点字研修会・点字プリンターの使い方（8月）
- 事例研集会（8月・11月）
- 視覚障がい理解研修会（2月）
- 年度末の実践総括（3月）

（3）視覚障がい理解の研修（H27年度・H28年度）

①「桂福点さん(柁川 明)の講話から考える」(H28.2月)

本校卒業生の柁川明氏（桂 福点）より学ぶ

先天性緑内障による視力の低下から活動や運動を制限されたことを不憫に感じた小学校の担任に転校をすすめられ、小学3年生に本校へ転入する。本校在学中は体験入舎から寄宿舍の利用を始め、思春期の生活の基盤を築く中で、視力の低下、失明の恐怖と葛藤しながら過ごす。

点字の習得の為に毎日遅くまで教室に残って学習をし、ストレスを抱え不安な気持ちを寄宿舍で立て直す。寄宿舍生活の中で自分よりも重い障がいのある後輩の歌に励まされ、自殺をも考えていた自分のちっぽけな価値観に気づかされたと言われる。今の自分があるのは当時の寄宿舍が、一人ひとりに合わせた利用形態、日課の中で安心して過ごせる場であったこと、その環境の下で行事やクラブ活動などの様々な取り組みを通してたくさんの人との関わりで自分らしく生きる勇気を持てたからだと言われる。また、集団の中で生じる他者との関係性や洗濯・掃除などの体験が大学生活に役立ったとも語られた。異年齢の中で起こるさまざまな現実と真正面に向かい合う姿勢、落語家になった経過など笑いあり涙ありのお話だった。

②大阪市域支援教育研修会

「視覚に障害がある児童・生徒の自立にむけて付けたい力」

「その人らしく育つ」を応援する

ー子どもたちと共に過ごした日々を振り返ってー

元本校教員 今井理知子氏の講話から考える (H28.8月)

今井氏自身が学校教育に携わってきた中で子どもの事実から学んだこととして、次のように語られた。

教科学習で大切なことは、視覚以外の感覚をフルに活かして外界を知ろうとする力を育てること、そのための体験の場を工夫し、子ども自身が知りたいと思うタイミングを掴むことである。また、他の障がいと併せ持った子どもたちの教育では、発達の手筋から学び、子どもに寄り添い丸ごととらえること、楽しいと思える時間の共有が大切である。寄宿舎は、生活の視点で安心しながら学ぶ場であり、自分の障がいを受け入れられる場である。親子の距離を置くことで自立への広がりにつなげることができる場でもある。学校と寄宿舎で子どもたちが見せるそれぞれの顔はどれも本物であり、連携し丸ごととらえることが大事である。寄宿舎指導員が命を救った実践があることも紹介された。(全国障害者問題研究会 障害者問題研究 vol.38 no3 引用)。卒業生から学ぶ事として、29年ぶりの同窓会で見られた、作業所で働く姿、ピアニストとして生きる姿など「その人らしく生きる姿」から、自立への道のりを励ますものとは、子どもに寄り添いながらありのままの姿を肯定的に受け止めることである。失敗してもやり直すことはできる。人は人の中で育つと語られた。その他に出前療育の実演、お勧め参考書籍の紹介もあった。

③「障がい児・者の福祉利用を学ぶ」(H28.7月)

社会福祉法人「路交館」

発達支援センター「わかくさ」施設長 鍋島淑江氏

社会福祉法人「東淀川福祉会」

生活介護施設「あすわーく」施設長 山内泰典氏

鍋島氏は保育園で経験を積まれた後、児童発達支援センターを立ち上げ、現在に至る。さまざまな子どもと関わり、保護者と共に子どもの成長を見守ってこられた経験を活かし、現在施設長として勤務されている中、子どもたちが一緒に育ちあう「共同保育」を大切に子ども

たちが自分たちの生活を自分らしく過ごせるよう支援されている。

近年、急増している放課後ディサービスやショートステイなど、利用する際の手続きや日課などハード面とソフト面の研修をした。放課後及びディサービスは送迎をメインにしているので、往復の時間以外に実際の保育はDVDを数分見るだけ…という事業所もあり、吟味して選ぶ必要があるとアドバイスを受ける。さまざまな障がい児を受けて入れている事業所になるので、視覚に障がいのある児童は他児から噛まれる・突き落とされるなど、安全面の確保が検討課題だと聞く。

また、山内氏からは将来的に福祉施設を利用する子どもたちが成人するまでに付けておきたい力もお聞きすることができた。

どちらも生活の場である共通の視点から、寄宿舍生活で人と関わる力、暇な時間をつぶす力など、教科書には載っていない学びが重要だとのことだった。児童福祉・生活教育、それぞれの立場での課題や支援のあり方など情報交換することができた。

(3) 研修をすることの意義

子どもたちを取り巻く社会情勢は日々変化している。てんかん発作や障がいに対する定義や概念もここ数十年で大きく変わってきている。

寄宿舍で年度初めと学期末に行っている各パート（小・中・普・理）の実践総括は、個々の舎生の既往症や生活環境も含めた状況を把握し、安心して寄宿舍生活を送らせる基礎になっている。また、年間計画で取りくむ研修・研究は舎生一人ひとりの成長発達をより深く理解する機会となっている。私たち寄宿舍指導員はシフト制で仕事をしている為、個人の関わり方が他の指導員との整合性がなければ生活全般に悪い影響を及ぼしてしまう。舎生の生活そのものが寄宿舍教育の要であり、舎生が自分らしく生きる為に研修・研究活動で得た情報を実践する重要な場面である。

3. おわりに

本校は創立 116 年を迎えた歴史ある視覚障がい児・者の支援学校である。視覚支援のセンター的役割を担っている。21 世紀になり障がい児・者の教育・福祉も大きく変化している。児童・生徒（保護者を含む）の多様化により、教育現場に求められるものも大きく変化している。視覚障がい支援の専門性は元より併せ持つ他の障がいについての知識が求められている中、学校現場の教職員も支援費やガイドヘルパーなどの福祉の利用についての知識も必要となっている。

本校の就学前から後期中等教育までの一環教育の特性を活かし、発達のつまずきや問題行動の変化など事例検討も可能である。また、キャリア教育の視点も様々な切り口があり、興味関心のタイミングを大切に考えるならば学部の枠を超え取り組むことも出来る。例えば、小学生のときに分からなかった事柄が、高校生になって理解できたという現実もある。学部の枠を超えて子どもの発達を学習するなど、児童・生徒の実態にあった教職員の質の向上が問われている。子どもを中心に学部・保護者・その他各関係機関とも連携し研修・研究活動に取り組みたい。

編 集 後 記

本校では、研修の重点として「個々の幼児・児童・生徒の教育的ニーズに応じた教育実践を充実させるため、専門性の維持・継承・発展を目的とする研修・研究を推進する」と設定し、若手教員の育成とともに視覚障がい教育の専門性向上と継承を進めるべく研究に取り組んでいます。また、幼児・児童・生徒の発達段階・生活スキル・行動特性・学習状況等を各種の検査あるいは本校に特化した日常生活検査をさらに充実させるとともに、保護者との協働をもとに、一人一人の実態を明確にすることで、よりの確な指導・支援、配慮、さらに縦通しでの実態把握ができるような体制作りを実施してきました。

今後も、様々な視覚障がい教育における課題に真正面から取り組み、また多様化する教育的ニーズに対応しながら、視覚障がい教育・支援の拠点としての役割を果たすべく、努めたいと考えています。

最後に、この報告書を作成するにあたり、原稿執筆をはじめとして、ご協力・ご尽力いただいた皆様に、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

平成 29 年 3 月 研究部